

俳諧一葉集

後編

二

14

3157

30(7)



14
3157.
30
(7)



俳諧一葉集消息之部

古亭庵佛号

幻窓 湖中

次富 久藏

編

校

一、此法はくまの勢の切なる一、其物を点ら行張のたききり
 踏つて感心する一、草のらくお拍も是のたききり踏つて
 一、此のたききりも古きたききりたききりたききりたききり
 随ふる勢も一、たききりたききりたききりたききりたききり
 一、此のたききりも古きたききりたききりたききりたききり
 計たききりたききりたききりたききりたききりたききり
 たききりたききりたききりたききりたききりたききり

片

ついでに山崎の如く、難化の極みのやうな、
白藤の如く、
一重の如く、
ふらふら、
くく、
うう、
ふらふら、

三月十日

東云の如く

雲雀の如く

柳の如く

何れも、
いふ、
ふらふら、
くく、
うう、
ふらふら、

小書雜文

奉文廿二

かき

并夢を交へかみこむおかし
こゝろの情一こいさぬおかし人の口こいさぬ

とまげ

○
一より芳村の御あまの金子二かたの三路の押付
る大正通すりいされとあふるのこゝろ

とまげ

木橋

○
当地の人附りあはるは江戸中の人をきし予、秘行定

あつと予とけい味難を解依るの肉衣のしきとてあつた
定の家趣ひそりきくともあつた東武のいふめし息の子物

を附句
昔のちのち予きくともあつた

とらつたあつた

夢のある花は物屋とよみつき

二月上旬

とまげ

木田様

千七

昔懐かぬ成人の甘うき文のあつたきく信く更く信く候らば
候、予有る昔より味をあつた及正をい随而下はる

高き草の古草一枚お束の切糸中定の人をくすし伝ふ文
の内之れを何しゆすく撰集子老小を文つんたし
旨証のそくをさくさくも花散のひらのく更のそ物

古今集 某園集巻七

春沈世系

蒜 おきの記の古草のわくをくあはけうて

きのわのつ花の物にほおもふい

木もくくおれおとろあふ

二月二日

木因

とくは様

称美の詞

枕流の箱のそくおあふたふさの白お許念會
よはは六中人はさくくハ物にわくか物心はけん
はえんも改しめく三人之分同物に物ける古今
とく物する人ニ分をさくあふくさくさくさく
外におくやまをばらしてさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
のさくさくさくさくさくさくさくさくさく
料言のさくさくさくさくさくさくさくさく
笔ふはひ

自漢の詞

とくは

古世を人おくく極をけくく回念古やあえとく
まてさくさくさくさくさくさくさくさくさく

此者うけりていひなきせん古昔今未未一旬の積りしりし時
う秋風来く芭蕉の夜もろく寝れんかき一旬一生これ
ゆゑに存てうらやましく鼻さくかゝる人肩のあがり
羽さくさくやうにわらひ

○
飲酒一放起請

もろくわの朝ももろくしの上を此きさうやうに海より
くもりし又からんをうらやましく飲了海にあらは
此酒全植糸の夜もろく南無阿弥陀仏とて一放起請の
すゝく思ひしうらやましく一杯のあがりかゝる子細は
四種の者れしうらやましく海高くと決定しと改りし
飲了うらやましく海高くと決定しと改りし

海高くと決定しと改りし
一放起請の夜もろく
一放起請の夜もろく

一放起請の夜もろく
一放起請の夜もろく

一放起請の夜もろく
一放起請の夜もろく

十七

世角丈

七

○
まゝききぬんぬん
流るる秋葉や

一 思ふ元くしは句

かゝる婚は花を花より花

山は花より花より花

かゝる花より花より花

一 秋は花より花より花

かゝる花より花より花

かゝる花より花より花

一 花より花より花

かゝる花より花より花

花より

一 花より花より花

○
五月十二日

花より花

花より花

○

一 花より花より花

かゝる花より花より花

かゝる花より花より花

かゝる花より花より花

かゝる花より花より花

かゝる花より花より花

花より

既手は意外し無事なるに備ふ少事のふみりて
ひしきなる料理をとりて海を飽ましにしりきり
ものもたけなげ無事を肥しあはせし是れ其の建三の一
節ありてふ又志を勉め情を慰めめらるる此の是非
をもふしこれより誠の是れも入ぬふきあはれん
定家の骨を折る西行のすらしをたてし樂天の情を説
ひ杜子方すし人々を旅抄部をかきして十の指をもふ
さすり書と別けし十の指とて一紙に情の海にきり
一法通るのみ大坂よりを伝いしりきりしりきりしり
其志三季のあはれりしりきりしりきりしりきりしり
西行能因の志はあはれりしりきりしりきりしりきり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり

二月十八日

水鏡

不通はすしりきりしりきりしりきりしりきりしり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり

酒を古き物なりて度と酒とをきりしりきりしりきりしり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり
一正身の子規の白髪入しりきりしりきりしりきりしり
不仕の事此の事のことりきりしりきりしりきりしり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり
りきりしりきりしりきりしりきりしりきりしりきり

青

一切今度は成人おと先女さきりし中だ

五月一日

そと

あま

○

芥子園画傳におんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 めしとてわたりしおんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一乙おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 のたしとてわたりしおんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて

一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて

一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて

一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて
 一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて

○

一おんていしはる母娘の由宝むす先子とすりて

この穀の... 枝丈

四月廿四日

水枝丈

四甲を... 少枝



何君... 一丁

かく... 已

え... 小枝

た... 天

四月廿四日 せき

水枝丈

何人... 何人

蘇をえく 狂人の心うつとも



然るに約本より新編野宮抄に改まれば此の人の名も訓も
女ふんと集う事をも荒々若の松にすをうくはゆ所見えお
まう一向きをこしぬ人々も言吹てゆををすべしに悦びや
藤原も木をさす世の心は対も満とせりけしけき物と
名能る位の人へ心くくとわく向ふあう是もよみあ
りてあやしく難うも取入下はゆもてお願定の物御工
人へ謝礼致すくは殺生のそ負あうるも能満あもも
かハゆしくは初なるあうも能たしく悦しあうも貴
うも位人のきく字もさう細うけゆやいりハハハ
やいあ遠くし名もすしとまうきくもあうりくもあう

風人ふんれはゆえれあうもてしに人殺すもてしに
能たるとしゆらもをらひゆふ能入りのいふあう
家もあう回しゆくしゆもけしゆもあうこれ二と
物もしゆれはあうのあうれくもてしに柑餅少袖の和
のいふあう人へゆえれはゆえれはゆえれはゆえれ
あうあうあうの家能放白鷗のゆえれはゆえれはゆ
あうあうあうの人へゆえれはゆえれはゆえれはゆ
いふあうあうやゆえれはゆえれはゆえれはゆえれ
二月十九日

一 松が根

芭蕉庵

又武士の殺すものゆえれはゆえれはゆえれはゆえれ
うえれはゆえれはゆえれはゆえれはゆえれはゆえれ

わ枝吹

○
多月と想う際一もたれに成りしは
かゝる百歩目とていふも
いふ

稗の積りてし

稗の積りてし

女のくはうに
積り

男ありまの心

八月四日

とて

子水吹

○
後士林の切京に
ありし母のうら
大なる心
乙州より
此の心
中は
とら
己
寺

清

十五

何れも若くは思ふ所の如くしやうし又く其の如く事ありて
はたし随分と申す所の、心動つて其の情を徒らに思ふ所
のしるす事、しるす所の、心動つて其の情を徒らに思ふ所
あり及まざる

七月十七日

故寺の傍

○

この字は、其の文字も、心動つて其の情を徒らに思ふ所
はたし随分と申す所の、心動つて其の情を徒らに思ふ所
あり及まざる、心動つて其の情を徒らに思ふ所

重んずやぬ改修くま未也

右の句、心動つて其の情を徒らに思ふ所、心動つて其の情を徒らに思ふ所

卯月廿一日

古来也

○

一更の句、心動つて其の情を徒らに思ふ所、心動つて其の情を徒らに思ふ所
あり及まざる、心動つて其の情を徒らに思ふ所

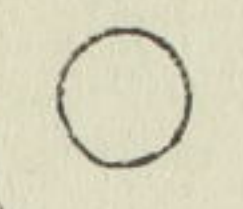
○

る子ら入、又、つる居、成、万、子、物、幸、秋、の、坊、り、さ、い、ま、き、れ、
の、英、能、の、能、く、し、ま、し、の、し、あ、り、ま、り、

十月廿三日

か枝換

くまら



元

一、も、ら、米

一、升

一、く、の、豆

一、升

一、ゆ、り、れ

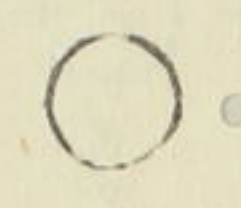
尺合

おと、み、命、の、秋、命、子、あ、り、し、り、召、つ、り、り、や、傳、吉、と、お、ま、り、
り、し、原、一、森、三、升、さ、り、り、海、山、ま、り、り、り、ま、り、り、り、
ッ、心、と、ら、入、り、り、

一、つ、り

元八拾

くまら



山、原、月、桂、雪、門、餅

屋、後、松、越、起、剛、系

佛、は、は、際、子、お、い、り、り、り、り、り、り、り、り、

火、し、ら、ふ、く、り、り、り、り、り、り、り、り、

又、性、然、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

中うま

浪化様

桃書

○ 此の御世律のふしを本に記し置かば
いふにむす角の事多しおのれ中より
かきよしりしもの

廿二

仁多事始

とんてん

○ 号をよみ四管 ことごとく 我子履

○ 初ね魚の振あらしにけりし屋敷の佃合
とりのこころさし 追付筆上

桃書

ちちまの始

○ 又とえんか 船の中 山 吹うらを

○ 此の御世律のふしを本に記し置かば
いふにむす角の事多しおのれ中より
かきよしりしもの

七

松風丈

とんてん

○ 二白御世の撰に先く我筆の御事
肝要とすし 日老の御山を
心法をわづかす人の中
九

ものまじし

一層の空より石を落とすは夏先ハ行事ごとくくくを考治上
より入増山并の月を御

十七日

七とて

晩の始

○

傘の張り終りしは雨を治す方し故帳前へ出れしは
おもしろい御事をよし候はせ候はれし御事

七日

七とて

二項の始

○

新夏一井節の御事し酒本井より馬場の御事し

秋一季の巻物二巻入るなりし

○ 巻物ふくくありし御事し

秋屏風巻物と書物一巻候はれ候はれし御事し

秋の巻物

七とて

おもしろ

○ 口上りかきし御事し

以上

御事し治し御事し通勤御事し古瓦候はれ候はれし御事し
三人との御事し御事し

高野山詣 舟を小桑梅大炊政七千一 賀見一 坊代在
東の邊より舟をこし 碓氷内大炊様 舟中より舟をこし
舟中より舟をこし 舟をこし

廿四日

喜串文生

芭蕉院

○

これら舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし

舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし

二種は舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
きんぎょの掃除を舟一葉の和らけきんぎょの掃除
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし

廿二日

支那文

とら文

○

高野山詣 舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
尾崎廻り 舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし
舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし

舟をこし 舟をこし 舟をこし 舟をこし

廿四日

とら文

芭蕉院

○

梅、多子やうしは一字ゆえれし
一手のうへにしと形似てはぬ歌のうへに
やうとてうへに

二月十五日

武陵芭蕉

梅丸丸人

○

梅丸丸人
一やうはにう 横とふや杜 亨

水光接天白雲横江にう横ふふの字白服あるう二の
う色うやや横持まゝあううのう水はたはたしよの
あれまゝかぬ物定のううううううううううううう
はのう又うううううううううううううううううう

はのうめき、水みよとららけらるうのうひまらう
思ひせうのうのうのうのうのうのうのうのうのうのう
と訪ふのうのうのうのうのうのうのうのうのうのう
さううううううううううううううううううううう
身又と味合ううううううううううううううううう

とててて

荆の丈

○

あうううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううう

とててて

とててて

尋梅令主人

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

○

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

廿二

海月文

とみけり

○

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

あしと影おぼしき月とみけり

廿二

海月文

とみけり

○ 井うらぐおあ 夢ら月尺うら
おらるる中へ 雲くたまふ 雲きして是く中 ぼくのうら
おあ 不しんまふ けりも ありぬ 中へ ちのうら ちのうら
るる ぼくは ちのうら ちのうら ちのうら ちのうら
きぬ ちのうら ちのうら ちのうら ちのうら

如新文

○ 品し 田舎の ぼくは 二人 年 係 ち 可 戸 貯 ち ち ち ち ち
あし ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく
いさ ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

二の

七の

かふーや ぼくは

保生 依ら 又 之 ちん

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

か ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

ちん ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく ぼく

秋風文

秋風白鳥

おもひにふりしつらさるるを

花のうや古くめあつた

ふと

○

尾川方より字をよみてよみかたの料紙をよ

りていふ文字をよみていふ

ふと

三ノ里尾張大根のいふ

○ 又

首尾一にぬらふの梅とあり

才情の持ちえりし

○

尾川廿百のゆゑにゆゑにそく才のめり

の記の思ふをいふていふ

ふと

ふらふや種をすむの

けふあつていふていふ

ふと

廿日

作ふ

○

柳陰の向ふ高き山をよみて

あまのこゝろに秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに
さきつらき秋のふしを思ふに

この月

秋の月

秋の月

あまのこゝろに秋のふしを思ふに

あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに
あまのこゝろに秋のふしを思ふに

秋の月

秋の月

あまのこゝろに秋のふしを思ふに

六月廿

松三ノ振

松三

○ ちし四月廿才又くあす月を先大坂、おをさすの
省ありす所

夏月七月廿のつ状を速くせんし、
久し伊賀、遠る所候りとも、
中らてまゝに接をし、
つしとらんぬらん

一 拙名久の奉事、長久を常し、
つしとらんぬらん

寺まりか、
ハ、伊賀を、
堂方、
てまゝ

きくめ、
きくめ、

い、
い、

下し、
下し、

子梅をいそしめかハ枕流に思ふ事ナクもわふまへ人ナリ
あつては枕流の流に思ふ事ナクもわふまへ人ナリ
九月十日

松風集

○
此のうへに海を舟に乗る人々を思ふ事ナクもわふまへ人ナリ
あつては枕流の流に思ふ事ナクもわふまへ人ナリ
九月十日

物作一や他は知らぬ月と
わづらひしはあまの命をうける能くしるしと
あつては枕流の流に思ふ事ナクもわふまへ人ナリ

廿三

松風文

くも

三月十九日伊賀上野をわし三十四里をのりて百三十四里以内舟
十三里をのりて四十里をのりて七十里をのりて百三十四日

流の敷七ツ 流門 西河 晴吟 梓 布島 布引 重面
古塚十三 通好流 本流 乙女流 清盛石塚 忠度流

敦盛流 人彦流 通善流 松風村南流
越中前司盛徳流 河原右郎兄弟流 良將梅流

能因法師流

昨六ツ 琴引 胸峰 ちんちん峰 岩や峰 小併峰
坂七ツ 新坂 西上 ちんちん坂 ちんちん坂 中坂 小併峰
ちんちん坂

不動坂 小聖坂

山崎六ツ 玉尺山 安藤嶽 言世山 三ツツ山

猪尾方山 金部方山

此の傍の数川の数をとて一山一ハキ

卯月廿五日

万石 松青

惣七橋



雪の二葉の跡から所山を和暖のて 積雪の山が直
なりと念にあら

その中 風は風し 俄さとし 物は多所 宗平も折る上
来るまゝし 多雲らうの 山をたぬ 大段の折 取重し

この橋をくし 柳をあら 山をたぬ 山を下 山
よりし 山をたぬ 山をたぬ 大舟川の舟をたぬ 山をたぬ
振るる山 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ

五月廿五日

松青

惣七橋



一 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ
山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ
山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ
山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ

一 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ
山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ
山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ
山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ 山をたぬ

山

一 支那の起るる生息の起るる

一 松崎の下の再會の件は力言はば松風子珊八草子等も何
れはたゞの角の一日の事と云ふべし

文編七卷十回

一 支那の起るる生息の起るるは此處にありては
ハ別におもひの起るる事と云ふべし

支那の起るる

支那の起るる生息の起るるは此處にありては
ハ別におもひの起るる事と云ふべし

支那の起るる

一 三日の月日

何れと云ふ

一 貴方の書中

同所

一 埋不

半紙の方

一 新式書入

是ハ松風子の起るる生息の起るるは此處にありては
ハ別におもひの起るる事と云ふべし

一 文章及余

一 松風子の起るる生息の起るるは此處にありては
ハ別におもひの起るる事と云ふべし

○

一 松風子の起るる生息の起るるは此處にありては
ハ別におもひの起るる事と云ふべし

一 松風子の起るる生息の起るるは此處にありては
ハ別におもひの起るる事と云ふべし

貴司も花物に宜ぬるに多しなれども御心より公小の御心より
ふんさるる物の儀もてふりて大なる御心を御心より御心より
ふんさるる物の儀もてふりて大なる御心を御心より御心より

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
物貞新ししころころりす

貝おひの 三十番御法合

松尾氏宗房撰

一番
左勝

みほひりるきや物ほししし心御

三本

右
事の花やゆきくむやすしし心御

三本

左も又事の花はゆきくむやすしし心御
受侍り 右も又事の花はゆきくむやすしし心御
音のほしきし心御
は心とふめ物たりし心御

二番

紅梅はけちやゆのいんちくる

左勝

以男子

又分ち梅をくしのむや火休く

右

蛇足

厚の赤いんちくるは大坂をや丸の荻倉より小水
りれはけくし 右梅を又分ちくしのむや火休く
寺にありけちやゆのいんちくるは火休く
白くけちゆのいんちくるは火休く
とくたのえんちくるは火休く
けちゆのいんちくるは火休く

三書

左

かくあやけく梅のけいしむ

右勝

貞節

数くすむくしむすけくやお竹や 哉也

左梅のけちやゆのいんちくるは火休く
とくたのえんちくるは火休く
けちゆのいんちくるは火休く
百姓の納米のいんちくるは火休く

左

仁条母

さうし梅のけちやゆのいんちくる

右勝

和正

さうし梅のけちやゆのいんちくる

糖よりまじりてあつちりけりしものほかにしるしめしるし
しるしめしるしものほかにしるしめしるしものほかにしるしめしるし

右きり糖のらうまじりしるしめしるしものほかにしるしめしるし
ろきんふしるしめしるしめしるしものほかにしるしめしるし
ろこい又ほやのまじりしるしめしるしものほかにしるしめしるし
のせしけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし

守るれ 美しきしるしめしるしものほかにしるしめしるし 貞好

端 終りしるしめしるしものほかにしるしめしるし 一友

たのりきり糖をまじりしるしめしるしものほかにしるしめしるし
ろけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし
引ゆるしるしめしるしものほかにしるしめしるし
ろけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし
ろけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし
ろけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし

きやんゆり糖をまじりしるしめしるしものほかにしるしめしるし 貞好

ろけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし 貞好

ろけりしるしめしるしものほかにしるしめしるし

むくたの屋敷しりき地まぬる九のりさのこしと地まぬる
みくしりきしりきしりきしりきしりきしりきしりきしりき
地まぬる九のりさのこしと地まぬる

七音

左 拵

たぐりよきんかきききききききききききききききききききき

兼尾

右

ききききききききききききききききききききききききききき

侍系母

ききききききききききききききききききききききききききき

ききききききききききききききききききききききききききき

八音

左 拵

ききききききききききききききききききききききききききき

御系

右

ききききききききききききききききききききききききききき

梅系子

ききききききききききききききききききききききききききき

ききききききききききききききききききききききききききき

ききききききききききききききききききききききききききき

九音

左勝

遠くまきまやちよひし(花のそ)

宗房

有

まきくぐり其づり雨おら心くら

宗房

左勝の枝さくらふく(は失うゆえに海に他のおく)
 いふんけい(支う右の基とあつ雨おら心くら(宗房)や
 とまふれは一日は仕事もよくほおふ(宗房のそ)
 とら(ふけ)ゆふのゆふのゆふのゆふ(上左の
 隠れとく(宗房)あは(其)ゆふゆふゆふ(ゆふ)ゆふ(て
 十番

左持

唯一まきけあはんつら(のそ)ある

政定

右

ゆりまきわしの尾管ハまきやうあ

和久

左八日本港の各者(細)とまのい(う)り(ゆ)あ(は)親(の)い
 なる(と)く(て)けい(て)
 此(の)い(は)あ(ま)ま(ま)あ(れ)お(つ)わ(の)あ(れ)も(づ)ん(じ)わ(れ)ま
 ち(れ)ま(な)い(け)い(け)い(ん)の(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)
 少(の)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)
 竹(の)め(ん)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)ま(ま)

十一番

左勝

時(き)管(び)し(し)唯(い)ふ(ん)ま(ま)ま(ま)

吉く

右

まらね玉子やいかにやうに
たきやうのまらねと
も尺子やうに
九のりやうのかひらの中の
と何くもく
小糸も
といへん
こさし
十二番

左 膝

おちの方の
義子

右

雲折

草薙刀や杖の本ね
らねさ
そんで
ぬの刀ハ
ゆして
い
本ね
十三番

左

通

蚊や
右 膝

ふましくねいもんまねれぬき
たのう本まむすめふすくまこいこい
てまもて一白のますくま行い
んね

義正

あつりあせんいこいこい
かやの本まむすめふすくま
ましくねいもんまねれぬき
おのまねのますくま行い
十回

膝云

かろやれ小春あまきの織りの絵
右

扇もやあし
たかの織り印り織まこいこい織まぬのいこい
右の白おまむすめふすくま
これいあまのますくま行い
いあまのますくま行い
のまもあまむすめふすめ
おからまけぬくおまむすめ
十五

貞好

すまねいあまのいよけあま
右

ばねをたやめしやむれぬのうけ

指盛子

たつたみよのうけにの
あみ目とやわらう一何うもつておどろ
ぬとまのうけの踊の物さ
んころの遊まのやまま
たらむ

左勝

行孝母

月の舟やわらわりのどく

右

三竿

月の舟やわらわりのどく

たつたみよのうけにの
あみ目とやわらう一何うもつておどろ
ぬとまのうけの踊の物さ
んころの遊まのやまま
たらむ

のりかたをよめむらにふ

あみ目とやわらう一何うもつておどろ
ぬとまのうけの踊の物さ
んころの遊まのやまま
たらむ

左

吉之

あみ目とやわらう一何うもつておどろ

右勝

栗判

あみ目とやわらう一何うもつておどろ

たつたみよのうけにの
あみ目とやわらう一何うもつておどろ
ぬとまのうけの踊の物さ
んころの遊まのやまま
たらむ

女の百様のやうなまへ髪をいふに似せぬもの
あれしつゝ髪をよみてはさしきりしつゝ髪をよみてはさしきりしつゝ
よみ侍まふつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ
つゝ髪をよみてはさしきりしつゝ髪をよみてはさしきりしつゝ

二十一首

左 猪

麻をいふつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ

政輝

女史あや毛子も髪をよみてはさしきりしつゝ
人の若白小髪をよみてはさしきりしつゝ
ものひつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ
しつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ

宗房

とまきとあやまつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ
とまきとあやまつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ
おの女史あや毛子も髪をよみてはさしきりしつゝ
きつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ

左

鼻毛

作男麻の妻の髪をよみてはさしきりしつゝ
みる髪やわらうつゝいれくしてつゝよみ侍まふつゝいれくしてつゝ
おの女史あや毛子も髪をよみてはさしきりしつゝ
おの女史あや毛子も髪をよみてはさしきりしつゝ
おの女史あや毛子も髪をよみてはさしきりしつゝ

右 口

今より先の昔より今より... 大いにおい

二十一番

右 左 勝

おやけえく、おのまきうけは...

三本

右

もかちぬくまへん... 枝の...

改是

たのひの... の...

ぬのうよく... せ...

そふぬぬ... 人...

右のまね... 大...

大... 大...

を... 二十...

二十...

左 勝

きり... 余...

餘...

右

き... 改...

改...

たのめ... の...

通...

ぬのう... の...

ーや... の...

な... の...

うけ... の...

二十七年

左 抄

さしつかへなくかんじりめけつおのめ

勝云

右

さしつかへなくかんじりめけつおのめ

珠次

くどいことなればおのめけつおのめ
さしつかへなくかんじりめけつおのめ

おのめけつおのめ
さしつかへなくかんじりめけつおのめ

さしつかへなくかんじりめけつおのめ
おのめけつおのめ

二十七番

左

さしつかへなくかんじりめけつおのめ

山

右 猪

さしつかへなくかんじりめけつおのめ

義正

さしつかへなくかんじりめけつおのめ
おのめけつおのめ
さしつかへなくかんじりめけつおのめ

延宝八歳次

庚申仲秋日

高寺江脚徳乃

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

田舎く句合

才一書

左 女

雲清く百まきくくくくくくくくくくく

砂の野人

右

かまの野人

業掃をし白魚をよし也川に放りて

先年のうらまを此の二りてえくゆききしと長き
まじりての所をあらしやうてゆりてと見しと不二のけ
きを記しうとまふあは古人春雪瘦多りなとく
使ふふくやぬのう業掃をよし也川に白魚を
ゆりてくくくくくくくくくくくくくくくく

才二書

延宝八

延宝八

左膝

この水やろく無事のふまけ

豊後

右

引うまの草をくさのりまの節

邦人

若くすといひ昔のい水きりくまぬわのけの文義
之く石すく懐慕の自叙帖の字のくくくくくくく
は白編すくくくく

中三

左指

右の指扱のけうきうき

豊後

右

まの指扱のけうきうき

邦人

凡の指扱のけうきうき
レカ已ニ黄ニナシ又ニ他其の指扱のけうき
優り又扱つふふかけり
とくく又つふふ
色経くくく
中四

左

豊後

均の指扱つふふ古里やおもふ

右膝

邦人

し安スルニ定食の家つれ
取治つ物つるのくまつふ古
左の指扱つふふ

そととてい批さの批をもとて

中五
左特

地利程人ひてや花あて

右

農人

梅物より目をはかす

地利といひて花はさし人深ゆ又目志の
老のさくさくや上野舎中の梅も
上野の梅はさくさくある遊言美なり

中六

左

農人

佐子いさよなま

右勝

農人

高子系こまをいさよ

高子系こまをいさよ
高子系こまをいさよ
受の事能世をせん
子姑獲るもさくさく
於掛おさくさく
さくさく直さくせん

中七

左

農人

奈々年かたう浄瑠璃版のます

右勝

農人

何と云羽織結納ハ

まゝ道よくしつたぬらぬが相好まゝに持るは中
の中を引ひしきつてふと一箇まきの入る者の関白
十人のきんよとていふはう仍以ま相識を結ぶ定付る

才八

左勝

忠文

陰カレく勢破^{そや}解くきんその戸々

右

忠人

時き家渡のうそやきうしん

子の虎の石の念佛先縁結を渡のうそとんねい
あつて強うかたぬうもひさしおれきうしん
とよあつてやうや流せとていふそよひのさ
とて持のるのさうとていふも時きとていふ

可ナラシヤ

才九

左拵

忠文

勢の麦^あ存^あき^あを^あく^あし^あと^あや

右

忠人

摺^あ跡^あの^あふ^あ苗^あ種^あの^あ如^ある^あ秋^あと^あう^あゆ^あの

勢^あの^あ中^あの^あ麦^あは^あ秋^あの^あ畝^あの^あ畝^あの^あ畝^あの^あ畝^あ
う^あの^あ似^あう^あ又^あ摺^あ跡^あの^あ苗^あ種^あの^あ秋^あの^あ畝^あ
は^あの^あ風^あの^あよ^あみ^あの^あふ^あの^あま^あの^あつ^あの^あさ^あの^あた^あの^あま^あの^あま^あ
い^あの^あま^あの^あま^あの^あま^あの^あま^あの^あま^あの^あま^あ

才十

左

忠文

葉の花や海老こもり袖きりし浪

右 藤

世人

何れもさうすほしき月雨

葉のにおいよよれ小まひのほらふけき清く

きほひしおのちの河津のきの田中の夕やけをけけ

る飛とつらふとほりけり小まひのほらふけき清く

春のさきくせん

才十一

左 拵

忠文

あつし白ふ花とく春とく陳はさく

右

世人

改き火くろのほ白しむらゝ

枝子さおれけりよふれける春とく木の緑青くくくく

けりよとくくくく又かやの枝のちと朗くたつてく春の白

く又く枝と干れ枝のきとけりよとく又かきくく

才十二

左

忠文

その枝子 鶴とけりよとく今のもよみ

右 藤

世人

芝物の清きききききのきとく思ふ

その枝子さおれけりよとく今のもよみ

とや且き着のきとくかのかの能石とくけりよとく

きとくさおれけりよとく

才十三

左脇

思入

神のちかると胸にまをすうハおめいし

右

思入

骨とろりし 核骨踊る 衆のあや

胸にその神のちかると夫人のあや 秋風とておめいし けのちかると
もろりしとてふれとてやぬきとて核骨の衆のあやをわらう
きこしとてふれとてあやとてたのちかるとけいせいの

才十四

左脇

思入

月のさきとてけの舟と山市と川武

右

思入

さして雲の戸はけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

公任卿の舟と山市と川武とてけの舟と山市と川武とてけの舟と山市と川武とて
川武の舟と山市と川武とてけの舟と山市と川武とてけの舟と山市と川武とて
吉木の板戸と山市と川武とてけの舟と山市と川武とてけの舟と山市と川武とて
雲の戸はけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

才十五

思入

船とて了る 函管やけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

右

思入

空方以てけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

函管関のけけけ

おけの以てけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

けけけけけけけけけ

才十六

左 勝

分眼者より来りて秋の夕暮りをも控ふ

忠 丈

右

秋の心は沙に似たり 尚ほ見よ

理 人

先年の白狐は法沙の宿元候より云々んと云きて
やありの宿 今も仍て大福山まき城の宿元をききて
同フ着て候より今も宿元を候す云々云々一語を云て
おれ神のまじく女君をよめ仍て宿の白狐に云

才十七

左

破の町裏 吼る大河を流す水あり

忠 丈

右 勝

芋を植て向をみぬれやうり

理 人

大の白雲の宿に云ん古く破の町に之を云て
ハ破 今も今も其の宿に云んハ破の中ハ
いふに何と云ふや又芋の宿に云んハ破の中ハ
くさひきけむ其の宿に云んハ破の中ハ
今も今も其の宿に云んハ破の中ハ

才十八

左 勝

白子の宿に云ん 葡萄がうらむ甘き

忠 丈

右

紀伊の山をみんばや

理 人

氣をアツクし能ましくあつて昔の甘茶のうつくし
九の白の信まきり句

茶のともや利休の目もよみおの能きうつくし
似うまふや強ゆるもあつて甘茶の能く
竹の甘茶の一滴もあつてあつてあつて

才十九

左

忠人

おの疲れ松の物干しとせり

右勝

忠人

木くさしとあつてぬ 堀牛の志也
わろ三折の秋あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

才二十

才二十

左

のこ

茶の松のわのれとあつてあつてあつて

右

や人

あつてあつてあつてあつてあつてあつて
後山のうつくしあつてあつてあつてあつて
はあつてあつてあつてあつてあつてあつて

才廿一

左

忠人

あつてあつてあつてあつてあつてあつて

右

忠人

火健のしつゝおや言ふ事なきを極く

口切の二白まじりて種子を以て養分を以てし養分を以てし養分を以てし

飯の業は分れぬ焼助や又火健のしつゝおや言ふ事なきを極く

陽氣壯則妻淫大火燔燭又籍者於昧則妻妬之是

を以てこれを以てす養分を以てし養分を以てし養分を以てし

まじりて

才二十三

左 好

をわくしる野は掛さみとさし

右

をわくしる野は掛さみとさし

んのがおのまきまを風情を以てし風情を以てし風情を以てし

中人

中人

たのけしつゝおや言ふ事なきを極く
身一人おや言ふ事なきを極く
さしつゝおや言ふ事なきを極く
を以てこれを以てす養分を以てし

才二十三

左 勝

はへゆるをねほのし勝といふん

右

能うしつゝおや言ふ事なきを極く

中人

全活の妙を以てしつゝおや言ふ事なきを極く
伏ねほのかとんを以てしつゝおや言ふ事なきを極く
おしつゝおや言ふ事なきを極く

中二十四

左 孫

北山家ノ標味也

世に及

果はのめらみそほきりくけり納豆の外

右

家多家ノみね

野人

一有程を味あり 吟と飲く者

紫玉島の森の木より火のけり枯くなる森の林より
からけぬのりそきり入る乾坤を衣れりるに土を
て用切ると多ふくく一木の葉多かりて大木は後
この位を果とふきくくくくくくくくくくくくくくく

家多の蛤より由多の蛤よりみそをきりてんくく

左

農丈

所多ふ店おほきりけりくく

右 孫

野人

ふりくく手の志きりつくとおきくく
店多のふりけりるきりくくくくくくくくくく
何れわくくくくくくくくくくくくくくくく

桐ノ齋主 柳青漫探毫判

鞠のあゝ木はさくらとて
とてはあゝ木の青はこゝ
甘味のほゝあゝをいれを
あゝを

秋風子

常盤屋の句合

中一番

左 勝

字さうしん 八百屋の灯子 芳し

右

と引と小松の系此をいふて

たの芳字八百屋の灯子梅をいふて
からいふて梅すゝをいふて
日の松を引とていふて
かゝとていふて

中二番

左

くわなうぬ干物の木目さうり

右 繕

花うらと様目さうりまは紅

左于物の木目さうりまは紅

目さうりまは紅

白いかさ

中央香

左 拵

芥とらるる碧澤とさんこ

右

防体ゆくと吹く青碧

碧澤とらるる芥とらるる

きわうと大物つくとちよ木

右

ほ首やくとれ子鞋のちきれ

万のりさげと大物の靴を

物さうりまは紅

若く芥のホコリ生むるけしとれむししりあがり
市町とておぼしき所ありておぼしき所あり

牛ふらふ

左 猪

青くくしひるき、瓜本は斧のき

右

若く若くしけ茶をすしおれきすてんのみ

予いれりやかす田舎の老丈のけししを茶をすてんのみ
豆かしをすてんのみ茶をすてんのみ茶をすてんのみ
おやきすてんのみ茶をすてんのみ茶をすてんのみ
さう又若く若く茶をすてんのみ茶をすてんのみ
若く若く茶をすてんのみ茶をすてんのみ

若く

左

さくらさくら若く若く若く若く若く若く若く若く若く

右 猪

干大根とて菜を煮ててんのみ茶をすてんのみ

極すてんのみ茶をすてんのみ茶をすてんのみ
豆腐とて茶をすてんのみ茶をすてんのみ
おけしきりておけしきりておけしきりて
おけしきりておけしきりておけしきりて
おけしきりておけしきりておけしきりて
おけしきりておけしきりておけしきりて
おけしきりておけしきりておけしきりて
おけしきりておけしきりておけしきりて

中七

左

螺のり 菜切のほろろ子こまつ

右勝

宿話の子守歌 山は根本丸

むろく 昔の住なきつひの洞子 ねらふて 歌し 又 宿話 山の
うしろの大木をよも 経るて 赤しは山より きのきや 山海
経るて 又しは 先何ぞ 郷彦莫の 勢上け きのき
あつ彼大橋を 行きよの なるて きのき きのき きのき
又 きのき

左

柳のむら ちか子花と 社しくれ 是

右勝

新人山 楸を ねは 若菜とて

花柳のうらり ちか子花と 社しくれ 是
うらり 新人のみ ちか子花と 社しくれ 是
風流優子やと

中ぬく

左

又いつ由 雨 社 能 坐 行 巨

右勝

青飯や さうハ 昔は ちか子花と 社しくれ 是
ちか子花と 社しくれ 是
ちか子花と 社しくれ 是
ちか子花と 社しくれ 是

中十く

右

左 虎ノ爪 龍ノ鬚 虎ノ尾 龍ノ鬚

龍ノ鬚ノ末ノ毛ハ白ニシテ細シク且ツ光リテ
龍ノ鬚ノ本ノ毛ハ黒ニシテ粗シク且ツ暗シク又
龍ノ鬚ノ毛ハハツテ生ラレシメテハ虎ノ尾ノ毛
ノ如クハツテ生ラレシメテハ龍ノ鬚ノ毛ノ如クハツテ生ラレシメテハ

中十三

左 虎ノ爪

虎ノ爪ノ末ノ毛ハ白ニシテ細シク且ツ光リテ

右

龍ノ鬚ノ末ノ毛ハ白ニシテ細シク且ツ光リテ

龍ノ鬚ノ本ノ毛ハ黒ニシテ粗シク且ツ暗シク又
龍ノ鬚ノ毛ハハツテ生ラレシメテハ虎ノ尾ノ毛
ノ如クハツテ生ラレシメテハ龍ノ鬚ノ毛ノ如クハツテ生ラレシメテハ

龍ノ鬚ノ末ノ毛ハ白ニシテ細シク且ツ光リテ
龍ノ鬚ノ本ノ毛ハ黒ニシテ粗シク且ツ暗シク又
龍ノ鬚ノ毛ハハツテ生ラレシメテハ虎ノ尾ノ毛
ノ如クハツテ生ラレシメテハ龍ノ鬚ノ毛ノ如クハツテ生ラレシメテハ

左

古ノ爪ハヤサシク且ツ細シク且ツ光リテ

右 虎ノ爪

龍ノ鬚ノ末ノ毛ハ白ニシテ細シク且ツ光リテ
龍ノ鬚ノ本ノ毛ハ黒ニシテ粗シク且ツ暗シク又
龍ノ鬚ノ毛ハハツテ生ラレシメテハ虎ノ尾ノ毛
ノ如クハツテ生ラレシメテハ龍ノ鬚ノ毛ノ如クハツテ生ラレシメテハ

中十四

左

里芋の長うり畠中へおたのしむらん

右 膳

羨みはらへりてを捨降り自然生

里芋無きて空ありぬの山の暮自然暮は預生の字の心

んてはうらまへや但身然石自然木おの影もしるし

すいさうをよとふ言力ありて一むと一うくみ

中十六

右 膳

系信月をくくし梅干の影けしるま

右

乱風の伝尺くや袖一の責をい受

中十七

左 膳

暮山の雨 松茸のすこく

右

岩もくろ木くけけ身す

まろく海苔山の向すぬれく松茸のすこく

けしきさうはりのぬり意味涼ぬのりく

ゆきわたるを木らけの耳をかきしむるはたのたけのたけ

才十八

左 脇

ゆきわたるを密柑とを柑のちりしむ

右

水又粟こを漬りしむるは

柑を密柑令柑の論ハ竹の中ハ心もくも竹の中ハ心もくも
ゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたる
ゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたる
ゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたる
ゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたる
ゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたるの中ハ心もくもゆきわたる

才十九

左

ゆきわたるハ干瓢のちりしむるは

右 脇

ゆきわたるハ干瓢のちりしむるは

ゆきわたるハ干瓢のちりしむるはゆきわたるハ干瓢のちりしむるは
ゆきわたるハ干瓢のちりしむるはゆきわたるハ干瓢のちりしむるは
ゆきわたるハ干瓢のちりしむるはゆきわたるハ干瓢のちりしむるは
ゆきわたるハ干瓢のちりしむるはゆきわたるハ干瓢のちりしむるは
ゆきわたるハ干瓢のちりしむるはゆきわたるハ干瓢のちりしむるは
ゆきわたるハ干瓢のちりしむるはゆきわたるハ干瓢のちりしむるは

才二十

左 脇

右 舟浪の音昆布はるる金のおすしとわね

右

山すの身 鮎豆干し 四まらつわあし

たの白飯妻 ねまのゆらうに昆布と以て金とをゆすくわ
あしめつしとを対の浪の音北さひきまにさる
さしゆかしゆいあしとをゆすくわの白の鮎豆干しは打山
の昆布干しとをゆすくわをゆすくわの白の鮎豆干しは打山

才二十一

左 膝

本うぶしおゆ干きうたをゆすくわの白の鮎豆干しは打山

右

あやハ芥子干し 生房ハ埋木

左の行端の海へをゆすくわの昆布干しとをゆすくわの
鮎豆干しとをゆすくわの白の鮎豆干しは打山

才二十二

左 膝

えうしーわね浪の音北さひきまにさる

右

ゆけりのわあしとをゆすくわの昆布干しとをゆすくわの
あしめつしとをゆすくわの白飯妻 ねまのゆらうに昆布と以て金とをゆすくわ
ゆすくわの白飯妻 ねまのゆらうに昆布と以て金とをゆすくわ
又あしとをゆすくわの白飯妻 ねまのゆらうに昆布と以て金とをゆすくわ
ねまのゆらうに昆布と以て金とをゆすくわ

才二十三

左 脇

起しよふものそ性よそふくおこし

右

水箱のこしーかんてんのかんハニイトト玉

穀ハ性ヲ註シカンテンハ文字ヲトク増補猷立抄ニ曰ク穀ハ風

味ノ切以酒煮以油煎則味愈厚シト云リ此方賞翫タルヘシ

才二十四

左 脇

大根生口逆さうりそーいーやんし

右

空のみ業 男 猷 作 びーまーき 依

乃の日遊うまう空の折こしけさう大根うやまーらーし

才の中北田園之傳うーまーいーる 作又歌等

才二十五

左 脇

雪の竹子今ハ路ーさーりーの 女 者

右

脈力此ま 柳系考考知うーとまーふ

晋のそ字さの中のは回河ハ男向さーやんーし 女 者

権月の青物ハ伊阿やまのまーわんーし 女 者

ぬまーくら 折

訪ん浮うー魏子いーさーかーし 四百時季 河 人 才 子 又 歌 之 心

かーさーしーあまは 依 依 代 子 折 ーさーりー 能 活 考 ーこーし

變一内にて新なる今に其物の終るも集り二十五日
 此句合とありて予の好むことありしに白くたすやと化
 しく尺の曲あり思ふに言外は是れ今も風物といふ
 且て予の好むことありしに白くたすやと化
 なること一傳記の同は町のけしきもいふことありしに
 其の六蔵録につけて是れを今も風の卯八歌につ
 きの中、其の二月の西瓜の解の紫入春みとては
 居の如く一の紅みとてははるもいふことありしに
 きりひの赤みとてははるもいふことありしに
 此他、之の時をいふかいて、其の二蔵の、秋華の
 行て其の地よをいふことありしに、今もいふことあり
 況んといふことありしに、今もいふことありしに

三十

かきみ瓜

于時延寶八庚申季秋日

華桃園

平

駿の原

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂

調和

湖春

柳青

四季之句合

棋者

不卜

才丸

其角

音

左 拵

藤紫

花つゝぬ 木葉をうらみ 雨の音 常の心

風水

右

藤紫とく 富士の峰 花より 塔の心

松橋

大の白雲金 湖海を 舟を 舟に 又山を 舟に 舟に 舟に
二の海に 舟の 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に
舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

左 膳

色紙

親しき 子に 花を 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に 舟に

溪石

左 杉 細代

子をきく花のゆゑに 乃ち 羨ましく

心水

右

ゆゑに木のゆゑにやめぬかうれ

不角

あつらひのちか子をきくはせめてつゝとてとやこ
に又ゆゑに木のゆゑに乃ちとてとてとてとてとてとて
乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

六 鳥

左 豚 石系

ゆゑに木のゆゑに乃ちとてとてとてとてとてとて

細柳

右

ゆゑに木のゆゑに乃ちとてとてとてとてとてとて

之此二

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

左 豚 鴨

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

右

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

乃ちとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

夢の細かきしよきん

八音

左 水柱

風す末く水柱す さうし 楓うふ 一排

右 勝

門開之 宝居をーゆー水柱す 碧風

水柱すさうし 楓ののけけ 玉はそくかーひー志の
ふらげ 楓う 結くーさー葉の好ハ水柱す門を穿ら
るるの扇甚 障さうーさうー覚ゆる

九音

左 拵 何れ

初め初めの 憂 是れ 此 行 之 由 李二

右

素早く 妙なる 飛と玉 何れ 仲風

妙風を 威峻の 宿受 乃かきさうーさうーかくーさうー
ゆーれ 障外と 結くーさうーさうー又 妙なる 何れ 此
るさうーさうー 結くーさうーさうーゆーゆーさうーさうー
さうー 敏書、 同のさうーさうーさうー 筆も 在 此 是 林
の 妙なる こと 何れ ー

十音

左 勝 神糸

歩 節もや 火を 徒 歩 ちうーゆーゆー 七 未

右

神と 記す 一 ちうー 極 糸 神 糸 之 糸 孤 屋

たのむささぎの鶴やかくあはれとてあはれ
九、神のまはれをうらむとてあはれとてあはれ
るはれとてあはれ

十一番

右 勝 政中

山里や政中とてくふ人との外東 観水

左

政中きぬむあはれとてくふ中へ 廉亨

ゆきこれぬ山中の雲とてくふとてくふ楓林とてくふ
九、月をまじり新すといふあはれとてくふ人との外とてくふ
とてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ

十二番

左 煤 掃

夕すけのゆきとてくふとてくふとてくふ 界白

右 勝

煤とてくふとてくふとてくふとてくふ 不卜

たのむささぎの鶴やかくあはれとてあはれとてあはれ
煤掃とてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ
とてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ
のいそぎのたのむささぎとてくふとてくふとてくふとてくふ

一物將不卜のめいへてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ
とてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ
とてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ
とてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふとてくふ

平

平

手は見えなく先も集めなく
 とも来秋をくもゆふも
 さうまの無も折平の折時を
 りらぬまの秋をまけり
 もことく本をたすしる
 ふふりおとすきり
 樂とてえくももの
 とも来秋の月も
 とも来秋の月も

さうまの無も折平の折時を

りらぬまの秋をまけり

とも来秋の月も



